《朗読（ナレーション）》

1．序曲

曲が始まって９小節２拍目から

これは、わたしが小さい時に、
村の茂平（もへい）というおじいさんから聞いたお話です。

朗読が始まる重要なところなので、特にはっきりと口を動かす。

１・２拍程度あける

昔、少しはなれた山の中に、
「ごんぎつね」という きつねがいました。

「ごんぎつね」を強調させたほうがいいので、そこだけ少しテンポを遅くして、はっきり喋る

ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、
しだの いっぱい しげった森の中に、
あなをほって すんでいました。

１６～１７小節目

１８小節２拍目

そして、
夜でも、昼でも、
辺（あた）りの村へ出てきて、いたずら ばかりしました。

一つ一つの動作の言葉できちんと区切る。（そこで役者は動くため）

畑へ入って いもを ほり散らしたり、

２２小節１拍目

菜種（なたね）がらの干してある のへ 火 をつけたり、
ひゃくしょう家（や）のうら手につるしてある
とんがらしをむしり取っていったり、
いろんなことをしました。

２５小節３拍目

2. ごんのテーマ

曲が始まって3小節1拍目から

ごんは、村の小川のつつみまで出てきて、
川下(かわしも)の方へと ぬかるみ道を歩いていきました。

「つつみ」のように、同じ母音続きの語句など、特にはっきりと喋る。
練習方法として、「つつみ」→「ううい」のように、母音に直して、
練習するといい。

13小節目

ふとみると、
川の中に人がいて、何かやっています。

ささやくように。

18小節1拍目

(ごん)「兵十(ひょうじゅう)だな」

いたずらぎつねになりきって、「今からいたずらしてやろう。」という気持ちで喋る。

21小節1拍目

兵十は 水の中から うなぎや魚をひきあげ、
びくの中へぶちこみました。

「びく」の「び」がアクセント。

28小節1拍目

それから、びくを土手(どて)に置いといて、
何をさがしにか、川上(かわかみ)の方へかけていきました。

37小節1拍目

兵十がいなくなると、
ごんは、ぴょい と草の中からとび出して、

ぴょい→少し高めの声で。

びくのそばへかけつけました。

45小節1拍目
ちょいと、いたずらがしたくなったのです。

いたずらっぽく。

49小節1拍目
ごんは、びくの中の 魚をつかみ出しては、
53小節1拍目
川の中をめがけて、ぽんぽん投げこみました。

ぽんぽん→少し高めの声で。

少し間をとる。（3拍程度）
いちばんしまいに、太いうなぎを つかみに かかりましたが、

「かかりましたが…」少し諦め口調。

何しろ、ぬるぬるとすべりぬけるので、
ごんは、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。

句読点どおりに。つなげすぎると分からなくなってしまうため。

70小節目
そのとたんに、兵十が、向こうから、

勢いをつけて。喋り方も少し早めで、慌てている感じがいい。

(兵十)「うわあ、ぬすっとぎつねめ。」

裏声でいいので、とにかく驚いた兵十を演じる。喋り方も少し早めで、慌てている感じがいい。

76小節目
ごんは、びっくりして、とび上がりました。
うなぎをふりすてて、いっしょうけんめいに、にげていきました。

喋り方も少し早めで、慌てている感じがいい。

８７小節１拍目
しばらくしてふり返ってみましたが、
兵十の姿は、見えませんでした。

落ち着いた感じで喋る。

９４小節目
ごんはほっとして、
うなぎの頭をかみくだき、
あなの外の草の葉の上にのせておきました。

１０１小節１拍目

落ち着いた感じで喋る。句読点どおりに。「草の葉」辺りのイントネーションに注意。

３．葬列のテーマ

5小節1拍目

十日（とおか）ほどたって、ごんはいつものように村を歩いていると、
兵十の家の前にはおおぜいの人が集まっていました。

十日ほどたって……ごんは～　（上のように間をあける）

9小節1拍目

すると

カーン、カーン（鉄板をたたく音）

どこからか かねがきこえてきました。

「すると」の後に、すかさず鐘が聴こえてくる。鐘の音を聞いて、３～４秒後には、「どこからか」に入る。

12小節1拍目

(ごん)「ああ、そう式だ。兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

「あ、そう式だ。」とにかくゆっくり喋る。ごんは、おそらく葬式に気付くまでに時間がかかったと考えて。「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」心配そうに。

14小節1拍目

ようく見てみると、兵十が位はいをささげているのが見えました。

「位はい」はっきり喋らないと、聴こえ辛くなる。

１７小節目

(ごん)「ははん。死んだのは兵十のおっかあだ。」

「ははん。」　「はっはーん…」と、ゆっくり間を空けて。
「死んだのは兵十のおっかあだ。」息を洩らしながら。真剣に。ここでの喋り方で、次に繋がることを考えて喋る。

１９小節目

そのばん、ごんは、あなの中で考えました。

２２小節１拍目

(ごん)「兵十のおっかあは、とこについていて、
うなぎが食べたいと言ったにちがいない。
ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとってきてしまった。
だから、兵十は、おっかあに うなぎを食べさせることができずに
死んじゃったにちがいない。」
「あんないたずらを
少し間をあける
しなけりゃよかった。」

２７小節３拍目

ごんはここで後悔しているので、声のトーンは低めで。
とにかく後悔しているごんをなりきる。
「あんな…いたずらをしなけりゃよかった。」息を洩らしながら、間を

4. 彼岸花

3小節1拍目

兵十は今まで、おっかあと二人きりだったので、
おっかあが死んでしまっては、もうひとりぼっちでした。

「もうひとりぼっちでした」　悲しそうに。

7小節1拍目

(ごん)「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」

悲しそうに、後悔した感じで。息を洩らしながら。

9小節1拍目

ごんは そう思っていると、どこかでいわしを売る声がします。

少し抑揚をつけて。

3拍程度、間をあける

12小節1拍目

(いわし屋)「いわしの安売りだあい。
いきのいい、いわしだあい。」

マイクから少し離れて、思いっきり。いわし屋になりきって、喉から声を出すのではなく、全て腹から出し切る。声を張り上げて。

3拍程度、間をあける

15小節1拍目

ごんは、その、いせいのいい 声のする方へ走っていきました。

いわし屋で変な叫び方をしてしまうと、次の出だしが喋りにくくなってしまうので、要注意。

19小節1拍目

そして、うなぎのつぐないにと、
いわし売りが道ばたに置いていった車から、
いわしをとって、兵十のうちの中へ投げこみました。

23小節目
次の日には、山でくりをどっさり拾って、
兵十のうちへ行きました。

27小節1拍から2拍目
うら口からのぞいてみますと、
兵十は、茶わんを持ったまま、
ぼんやりと考えこんでいました。

31小節目
(兵十)「いったい、だれが、
いわしなんかを、おれのうちにほうりこんでいったんだろう。
おかげで、おれは、ぬす人(びと)と思われて、
いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた。」

兵十になりきって。少し声のトーンを低めにして。

36小節1拍目
ごんは、

(ごん)「これはしまった。
兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、
あんなきずまで付けられたのか。」

「これはしまった。」　「あ！しまった！」という感じで。

40小節1拍目
ごんはこう思いながら、
そっと物置の方に回って、
その入り口に、くりを置いて帰りました。

45小節1拍目
次の日も、その次の日も、

48小節1拍目
ごんは くりや 松たけを拾っては、
兵十のうちへ 持ってきてやりました。

６．ごんの死

ナレーションのみ　※基本的にゆっくり喋る

その明くる日も、
ごんは、くりを持って、兵十のうちへ出かけました。

「明くる日も」　イントネーションに注意。

兵十は物置でなわを なっていました。

「縄をなっていました」　イントネーションに注意。

それで、ごんは、
うちのうら口から、こっそり中へ入りました。

こっそりと喋る。ささやくように。

そのとき、兵十は、ふと顔を上げました。

「その時」　勢いよく。

と、きつねがうちの中へ 入ったではありませんか。

驚いた感じで。

(兵十)「こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、
またいたずらをしに来たな。」
「ようし。」

声のトーンを少し低めに。はっきり喋るというよりかは、相手に聴こえないような喋り方の方がいい。

兵十は立ち上がって、なやにかけてある 火なわじゅうを取って、
火薬をつめました。

緊迫感を持たせて。

そして、足音をしのばせて
↔ 2拍、間をあける
近よって、今、
↔ 2拍、間をあける
戸口（とぐち）を出ようとするごんを、
↔ ゆっくり2拍、間をあける
ドンと、うちました。

句読点ごとに間をおく。ゆっくり、2拍ずつぐらい。

← 10小節1拍目
ごんは ばたりとたおれました。

これ以降は、悲しそうに。語りかけるように。

兵十はかけよってきました。
うちの中を見ると、
土間にくりがためて置いてあるのが目につきました。

← 12小節から13小節目
(兵十)「おや。」と、

兵十は、びっくりして、ごんに目を落としました。

← 15小節目
(兵十)「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は、火なわじゅうを ばたりと、取り落としました。

← 20小節目
青いけむりが、まだ、つつ口から細く 出ていました。

「筒口から細く…出ていました。」　タイミングをしっかり合わせて。